

コミュニケーションにおける引用可能性と教育的パフォーマンス

土戸, 敏彦

九州大学大学院人間環境学研究院国際教育環境学講座 : 教授 : 現代教育思想論

<https://doi.org/10.15017/25345>

出版情報 : 大学院教育学研究紀要. 14, pp.21-39, 2012-03-26. 九州大学大学院人間環境学研究院教育学部門

バージョン :

権利関係 :

コミュニケーションにおける引用可能性と 教育的パフォーマンス

土 戸 敏 彦

コミュニケーションなる紛うことなき日常的かつ自明な事がらが、実は途方もない複雑さのなかで生じているとは誰が想像するだろうか。そこには、主としてコンテキストの不確定さが絡んでいる。メッセージを取り巻き、支えているコンテキストとは、すこぶる不確かなものである。言ってみれば、それは、掴もうとすれば霞みのように手の中から洩れていき、捉えようもなく虚空に消え失せる。しかし、だからと言って、そんなものは取るに足りないなどとタカを括ろうものならば、コミュニケーションそのものから手痛いしっぺ返しを食らうだろう。コミュニケーションとは、ことほどさようなコンテキストの不確定性（さらに言えば、ある種の危うさ）のなかで成立しているのだ⁽¹⁾。

この不確定かつ危うい微妙な事態は、「教育」というコミュニケーションにおいては、どのような意味をもつのだろうか。それは、その独特のコミュニケーションに対して、「両義的パフォーマンス」⁽²⁾ という観点からどのような示唆をすることができるのだろうか。

1 コミュニケーションとコンテキスト

コンテキストの不確定性とそのコミュニケーションに対する関係について、どこから考え始めればよいのか。あるいはこの気の遠くなるような複雑怪奇な領域に、どのように分け入れればよいのか。以下、資料としてはやや古びた感があるが、微かなとば口を求めて、オースティンを批判したデリダ、そしてこのデリダを批判したサール、さらにそのサールを再批判したデリダ、それらの思索と議論を参照しつつ、考察を進めることにする。

そもそも、何よりも当のコミュニケーションというものが明らかだと言えるのか。デリダは次のように、その論文『署名・出来事・コンテキスト (Signature Événement Contexte)』を書き始めている。

「コミュニケーションという語に、唯一の一義的な概念、厳密に統御可能で伝送可能な、要するに伝達可能な (communicable) 概念が対応するというのは確かなことなのか。そこで、ある奇妙な言い回しにしたがって、ひとはまずこう自問せねばならない。『コミュニケーション』という語ないしシニフィアンはそれ自体として、一個の規定された内容、同定可能な意味、記述可能な価値を伝達す

る (communiquer) のだろうか、と」⁽³⁾。

デリダが指摘する、その内実が明らかでないという「コミュニケーション」には、後に述べるように「コンテキスト」という要素が必然的に絡んでいるが、このコンテキストなるものが実はコミュニケーションの曖昧さの核心に関わっている。つまり、何よりもまず問うべきは、コンテキストである。

「『コミュニケーション』という語の曖昧さの領野が、コンテキストと呼ばれるものの諸限界によって大幅に縮減されうるということは、自ずと明らかのように思われる (……まさにこの学会発表 (cette communication-ci) において取り上げられようとしているのは、コンテキストの問題であり、コンテキスト一般に関してエクリチュールはどのような事情にあるのかという問いである)」⁽⁴⁾。

このコミュニケーションとコンテキストの関係を見るとき、ある種の思い込み、つまりコンテキストさえ明確にすればコミュニケーションは曖昧ではなくなり、確実な内容が伝達されるという思い込みが、(後に見るオースティンやサールがそうであるように) 想像以上にわれわれのコミュニケーション観を規定していそうである。コンテキストというものに見かけ以上に根の深い問題が宿っていることに気づきうるかどうか、これが考察に踏み込むための一つの関門と言える。

「しかし、ある一つのコンテキストの諸要件は、果たして絶対的に規定可能であるものなのだろうか。……。コンテキストの厳密な学的概念は存在するのか。コンテキストという概念は、ある種の混同の背後で、非常に規定された哲学的な諸々の前-提 (pré-suppositions) をかくまっているのではないだろうか。……私が論証したいと思っているのは、なぜ一つのコンテキストは決して絶対的に規定可能ではないのか。あるいはむしろ、いかなる点においてコンテキストの規定は決して確証されることも充足されることもないのか、ということである」⁽⁵⁾。

このコンテキストにまつわる問題は、いわばその俗な意味からすると、話し言葉すなわち音声言語と密接な関係にあるように思われる。なぜなら、記録に残る書き言葉であれば、それが書かれたコンテキストが消え失せてもメッセージは変わることなくそのままの姿をとどめるのに対し、話し言葉のメッセージはそれが発せられたコンテキストに著しく依存しているように思われるからである。ところがデリダに従うなら、むしろ書き言葉、書記言語、すなわちエクリチュールとの関わりにおいて考察することによって、コンテキストの問題ははっきりしてくるように思われる。これはどういうことか。

まず確認しうるのは、エクリチュールは「受け手の死」を前提しているという事実である。

「私の『書かれたコミュニケーション』が、書くという機能をもつ、すなわちそれが読まれるという

可能性 (lisibilité) をもつためには、それは所定のあらゆる受け手一般が絶対的に消滅してもなお、読解可能 (lisible) にとどまらなければならない⁽⁶⁾。

「受け手の死を越えて構造的に読解可能——反覆可能 (itérable) ——でないようなエクリチュールは、エクリチュールではないだろう⁽⁷⁾。

コミュニケーションは送り手と受け手との間で成り立つとされる。しかし、エクリチュールは受け手の不在にあっても読解されうるものとして存在しなければならない。そして、そのかぎりにおいてエクリチュールは、コンテキスト、すなわちメッセージが発せられたまさにその時点の全状況、いわば「諸現前の総体」から断絶しうるのである。

「……書かれた記号は、そのコンテキストと断絶する力、すなわち、それが書き込まれる瞬間を組織する諸現前の総体と断絶する力を含んでいる。この断絶力は、偶然的な述辞であるどころか、書かれたものの構造そのものである⁽⁸⁾。

さて、ここから意外な展開が提示される。というのも、デリダによると、エクリチュールのこの特徴は、実はエクリチュールだけのものではなくて言語活動一般に当てはまるというのである。

「これら三つの述辞（主観の不在、コンテキストとの断絶力、間隔化—引用者・註）は、いかなる言語活動にも見出されるのではないだろうか。たとえば話された言語において、また究極においては……『経験』の全体において見出されるのではないか⁽⁹⁾。

「指示対象やシニフィエ（それゆえコミュニケーションとそのコンテキスト）を断たれているというこの構造的な可能性が、たとえ口頭のマークであろうとあらゆるマークを書記素 (graphème) 一般たらしめるように思われる⁽¹⁰⁾。

要するに、音声言語や書記言語、その他の言語を問わず、あらゆる言語の根底に書記言語的な要素が含まれている、というのである。

そもそもデリダの思索の原点は、古代ギリシア以来の西欧哲学全般を支配してきたいわゆるロゴス中心主義の形而上学、すなわち「自己への現前」を真理価値とすることによって音声言語（パロール）を称揚し書記言語（エクリチュール）を貶めるような哲学的態度を批判することにあつた。むしろデリダは、だからと言って、音声言語と書記言語の地位を単純に逆転させることを企図したわけではない。むしろ目指したのは、音声言語のなかにある種のエクリチュールがすでに潜んでいること、言語そのものもつエクリチュールの構造（もしくは運動）を指摘し、そのことを通して西欧形而上学の体系的基盤をいわば転覆し解体（脱構築）することであつた。

だとすれば問題は、音声言語か書記言語（エクリチュール）か、そのいずれかという表層の次元にあるのではなく、ある種のエクリチュールを根源的にはらんだ言語そのものにある、ということ

になる。すなわち、話し言葉・音声言語といえども、「受け手の死」を前提し、コンテキストから断絶しうるというのである。これは、言葉というものの根本構造だというわけだ。

そして、コンテキストから断絶しうるということは、見方を変えれば、伝達内容であるメッセージが引用されうることを意味する。理由は以下の通りである。そもそもコンテキストとは、言うならばコミュニケーションのリアルタイム環境をなす。つまり、メッセージの背景であり、図に対する地であって、それ自体で存立しうるものではない。しかし同時に、いかなるメッセージもなんらかのコンテキストなしにはメッセージたりえない。つまりメッセージはつねに何らかのコンテキストを必要とするが、その結びつきたるや限りなく儂く、その場かぎり、束の間のものである。そして、あるコンテキストが退いたとき、別のコンテキストがメッセージを包み、支えることとなる。このメッセージの不安定さ、浮遊漂流状態から、コミュニケーションにおける伝達内容が「引用」されうるということが帰結する。

「言語的であれ非言語的であれ、話されたにせよ書かれたにせよ、……また単位の大小にかかわらず、いかなる記号も、引用されうるし引用符で括られうる。まさにそのことによって、すべての記号は、所与のいかなるコンテキストとも手を切り、無限に新たなコンテキストを発生させることができ、それは絶対に飽和することはありえない。このことが前提としているのは、マークがコンテキストの外でも有効だということではなく、逆にいかなる絶対的な投錨中心もない諸々のコンテキストしかないということなのだ」⁽¹¹⁾。

2 引用可能性をめぐる

いかなるメッセージ、いかなる発言であろうと引用されうる、とは、どういうことか。

そもそもこの問題は、オースティンが『言語と行為』で展開した言語行為論に端を発している。オースティンは、事実確認的 (constative) 発言から行為遂行的 (performative) 発言を区別し、前者については真偽が問題になるのに対し、後者においては適切／不適切 (felicity/infelicity) が問題となるとした⁽¹²⁾。そして、後者の「不適切」な用法のひとつとして、次のような例を挙げている。

「ある種の遂行的発言は、たとえば、舞台の上で役者によって語られたり、詩の中で用いられたり、独り言の中で述べられたりしたときに、独特の仕方で実質のないものとなったり、あるいは、無効なものとなったりする」⁽¹³⁾。

しかも、このことはおよそ発言といえるもののすべてについて同様な意味で妥当するとされる。すなわち、それぞれの特異な状況においては、「言語は、……独特な仕方で——すなわち、それとわかるような仕方——、まじめに (seriously) ではなく、しかし正常な (normal) 用法に寄生する (parasitic) 仕方で使用されている」⁽¹⁴⁾。

この「寄生する」仕方での用法こそが、「引用可能性」問題の出発点である。「寄生的」でない、ということは、オースティンによれば、その遂行的発言が「適切」であり、「まじめ」であり、「成功」したものであり、標準とされるべきものである。デリダは、このオースティンのコンテクスト観に致命的なものを見ることになる。

「……オースティンの分析は、権利上ないし目的論的に、コンテクストという価値、それも限なく規定可能であるようなコンテクストの価値を恒常的に必要としている……。そして、遂行的発言の出来事に悪影響を及ぼしうるさまざまなタイプの失敗 (échecs, infelicities) についての長いリストは、全面的コンテクストとオースティンが呼ぶものの一要素につねに帰着することになる。この全面的コンテクストの本質的要素の一つは——だがこれは他に数あるうちの一要素などではない——古典的な仕方、依然として意識にとどまっている。つまり、みずからの発語行為の全体に対して、語る主体の志向 (intention 意図) が、意識的に現前するというわけだ」⁽¹⁵⁾。

しかしデリダは、「現前の形而上学」批判を基調とする考え方から、話し手においてさえ発言が志向 (意図) の純粹かつ完全な現前においてなされているとは言えないと主張する。これはすなわち、いかなる発言も「寄生的」に用いられうる、言い換えれば何らかのかたちで「引用」されうることを意味する。オースティンはまさにその、「引用」されるあり方を「寄生的な」ものとして排除したのだが、デリダによれば、「どんな遂行的発言であろうと (そしてアプリアリには他のすべての発言が) 『引用』されうる」⁽¹⁶⁾ のである。

デリダによると、引用可能であるということは、根底において反復可能、反覆可能であることに基づいている。すでに引用した「読解可能」に関する部分に続く件りである。

「それ (私の『書かれたコミュニケーション』) は、受け手の絶対的な不在、ないしは経験的に規定可能な受け手の集団の絶対的な不在において反復可能 (répétable) —— 反覆可能 (itérable) —— でなければならない。」⁽¹⁷⁾。

「そもそも、結局のところ、オースティンが異常、例外、『ふまじめ』として排除しているもの、つまり (舞台上での、詩のなかでの、あるいは独り言のなかでの) 引用は、ある一般的な引用性の——あるいはむしろ、ある一般的な反覆可能性の——限定された変様なのではないだろうか。そして、そのような一般的な引用性がなければ、『成功した』遂行的発言さえもありえないのではないだろうか。……成功した遂行的発言といえども、否応なく『不純』なのである」⁽¹⁸⁾。

引用された形、「寄生的」な形を二次的なものとして位置づけ、それをあらかじめ排除して、オリジナルな形を基準として遂行的発言すなわちメッセージを考察するのは、問題のありかを根本から見失ってしまうことになるのではないか、むしろ引用されうること、「寄生的」に用いられうることこ

そが、メッセージというものの根源的なありようではないか、これがデリダの言わんとするところであった。

これに対して、サールは雑誌論文「差異ふたび・デリダへの反論」において、デリダはオースティンの誤解に基づいて議論を展開していると断じた。彼によると、オースティンが「寄生的」な言語使用を考察から除外したのは、「形而上学的除外」ではなく⁽¹⁹⁾、「論理的に先行するべき「まじめな」言語使用に関する疑問に対する解答を得るのを待つ」ための「一時的な除外」⁽²⁰⁾だった。だからデリダは「非標準的な場合」を標準として考えようとしている、というわけである。

ここには、問題に対する根本的なスタンスの相違があるのだろう。おそらく、事がらをサール流に考えることもできないわけではない。この問題に正解などないのかもしれない。ただ、「パフォーマンスの両義性」というテーマを取り扱おうとしている目下の問題意識にとっては、サール流の思考では解くことができないということも確かな事実である。

ここで初歩的な確認であるが、遂行的発言における伝達内容、すなわちメッセージについて見ておく。コミュニケーションは、その構成要素を原理的に見るならば、メッセージ、コード、およびコンテキストから成り立っている⁽²¹⁾。メッセージはコードとコンテキストの双方に依存しているが、両者への依存の度合は一方への依存が増大すれば他方への依存は減少するという関係にある。仮にメッセージが100パーセントすべてコードに依存しているとすればメッセージに解釈の幅はなくなることになるが、コンピュータ言語などによるコミュニケーションを除けば、現実にはそのようなことはほとんど皆無である。すなわち、何らかのコンテキストが介在するかぎり、メッセージはいわばそれ自身が「表現」している以上の意味をたえず持ちうることになる。

問題になるのは、まさにこの、メッセージが必然的に生み出す、メッセージが表現している以外の、あるいは表現している以上の意味である。メッセージはつねに一義的で明確な意味をもっているわけではなく、コンテキストによって、さまざまな意味を湧出させ、派生させうる。動的な間隔化とでも言える運動が、つねにそこにはあるのだ。この核心とも言うべき点を理解しないサールは、デリダはある幻想を抱いていると言うことになる。

それは、「発語内意図というものは、そもそもそれが存在したり重要なものであるならば、発話の背後に控えるなにか、すなわち、目に見える記号に生命を与える内的な表象でなければならないという幻想」である。続けて次のように述べられる。「ところが当然ながら、まじめで字義通りの言語使用においては、文はまさに正確にその意図の実現形態にほかならない。すなわち、発語内意図とその表現との間にはいかなる乖離も存在しない。文というものは、いわば意図の代替物である」⁽²²⁾。

ここでサールは、「意図」(志向)と「表現」という二つの項を示したうえで、デリダも当然その二項図式に従っているかのように述べている。しかし、そもそも発話行為に際してこの「意図」と「表現」という二項図式は疑いなきものとして存在するのか。

これについてデリダは、サールが述べている「デリダなる人物が信じているとされる『発話の背

後に控えるなにものか、すなわち目に見える記号に生命を与える内的な表象』の錯覚は、……言語の心理学の、もっと正確に言えば、Sec（『署名・出来事・コンテクスト』－引用者・註）がどんな倒錯的ないしはバロック的な退行のゆえにそこに汲むことができるのか、首を傾げたくなるような前－批判的心理主義の貯蔵庫に属している……」⁽²³⁾として、サールの見当違いを指摘している。デリダは、「Secの一行一行に読み取ることのできるこの嫌疑は、システム全体に、すなわちこの対立構造（シニフィアン／シニフィエという対立構造－引用者・註）を支え、したがってとりわけ『可視的な記号』（シニフィアン）の背後に隠れた意図（志向）という対立構造を支えているシステム全体に向けられている」⁽²⁴⁾と、二項図式それ自体を疑ってかかっているのである。「意図」と「表現」なる構図そのものが問われているのだ。

コンテクストによって発言のもつ位置価は著しく変化するが、それをいわば序列化し、適切／不適切と区分したのがオースティンであった。それはまた、言い換えられて、正常／異常、まじめ／ふまじめ、とされ、それぞれ前者が基準・標準とされる。そして前者の場合、遂行的発言は「成功」した（うまくいった）事例とされ、後者にあっては「失敗」の（うまくいかなかった）事例ということになる。この「成功した」「適切な」ケースにおいては、行為遂行的発言は、サールの言うところによれば「意図」と「表現」が一致していることになる。これらが齟齬しているとき、「不適切」「失敗」というわけだ。

コンテクストは発話に著しい影響を与えるのだが、そのことによって発話内容すなわちメッセージを超えた、あるいは表向きのメッセージとは異なるメッセージが送られることもありうる。このことに注目してペイトソンは、「メタ・メッセージ」（メタ・コミュニケーション）という概念を設定し、メッセージとメタ・メッセージという構図によってコミュニケーションを考えようとした。だが、このメタ・メッセージの意味は、ペイトソンにおいても実はきわめて曖昧である。一方で言語に対するメタ言語的な位置づけの意味を持つかと思えば、他方で、表現されたメッセージに対するいわば裏の隠されたメッセージという意味ともなりうる⁽²⁵⁾。

おそらく、ペイトソンにあっては両者は区別されず、むしろ何らかのかたちで地続きのように理解されていた⁽²⁶⁾。後者の意味で考えるならば、「メタ」の意味は実は希薄になり、突き詰めればそのように表現する必然性がなくなってしまう。しかし、では、なぜ「メタ・メッセージ」という表現をあくまで採用しようとするのか、あるいはその表現にわれわれが惹かれるのか。その理由については先で触れる。

ペイトソンが挙げているダブルバインド状況とは、メッセージとメタ・メッセージとの相反する事態、あるいはメタ・メッセージがメッセージを否定する事態である⁽²⁷⁾。このメッセージは、オースティンによれば、不適切な遂行的発言と端的に分類されるだろう。オースティン・サール流に言えば、この事態は意図と表現の不一致であり、メッセージは不適切な遂行的発言ということになる。

ちなみに、ペイトソンが言うメタ・メッセージには「無意識的」なもの、意識化されない身体的なものが含まれる。サールが「意図」と言う場合にも、かならずしも「意識的」とはかぎらない。

「実際問題として、われわれの意図のうちで意識にもたらされるものはむしろほとんど存在しない」⁽²⁸⁾とさえ述べている。「意図」が無意識的でもありうるならば、意図と表現が一致していることを誰が、あるいは何が確認しうるのか。実のところ、そのようなものは存在しないし、確認しようもない。この点からも、意図と表現の一致する場合を標準だと考えるのが果たして妥当かという疑問が出てくる。

結局のところ、オースティンの言う felicity の含意は何であったのだろうか。あるいはなぜ、felicity なのか。とどのつまり、「意図」と「表現」の一致、行為者の志向（意図）がいわば発言に“寄り添って”いる（あるいは、発言が志向に“寄り添って”いる）、という事態のみを指しているのだろう。それ以上でもそれ以下でもない。したがって、そこにいわゆる価値の正負は入り込む余地はない。通常の意味における「成功」も「失敗」もなく、「適切」も「不適切」もない。おそらく、オースティンもそう考えていたはずであり、やむなくそのような表現をとらざるをえなかったのだろう。ただし、そうだとしてもオースティンの説によれば、たとえば、演技はつねに、遂行的発言としてはあくまで「不適切」であることになる。

「メタ・メッセージ」なる考え方を、さしあたって用いるならば、こういうことである。「適切」とされる遂行的発言においては、メッセージは主体の志向が純粹かつ完全に実現されており、言い換えるならメッセージとメタ・メッセージとの間に齟齬がない。これは「表現」と「意図」が合致しているということだろう。つまり、この場合にはメタ・メッセージがそれとしては問題にならないのだ。対して、メタ・メッセージがいわば不穏な意味を持ちはじめるのが「不適切」とされる遂行的発言である。たとえば冗談・皮肉におけるメタ・メッセージなどは、わかりやすい例である。いわゆる「言外の意味」ということになろう。つまり、「不適切」な遂行的発言においては、メッセージに表現された以外の意味が問題になることを意味する。だとすると、「表現」がメッセージ、「意図」がメタ・メッセージに対応すると言えそうだが、果たしてそうか。

芝居における役者のセリフの行為遂行性を考えてみよう。これは「不適切」の典型である。「表現」と「意図」が決定的に乖離しているからである。そのメッセージは劇中の共演者である聞き手に向けられているが、役者の「意図」はセリフを聞かせるべき相手としての観客に向いている。つまりメタ・メッセージとは、「これは芝居である」というものだ。

では、何がこれほどまでの差異を生み出しているのか。それは一に懸かってコンテキストによる。すなわち同じメッセージが、コンテキストの布置の違いに従って異なる「意図」（志向）をもつのだ。芝居における役者のセリフは、観客への現前を前提としているが、稽古の際は観客は不在である。オースティン流に考えれば本番と稽古の双方において行為遂行性は「不適切」であることに変わりはないが、それぞれのコンテキストは“常識”的にもコミュニケーション的意義にとっても決定的な相違がある。本番と稽古の双方において、少なくとも主体の志向の純粹現前がなく、セリフは何度でも反復される。しかし、最終的には観客への現前というコンテキストが存在しなければ、この行為遂行性は実現されたことにならない。逆に言えば、観客への現前に際してはじめて、演劇の行為遂行性は実現されるのである。ある意味で、それは「成功した」遂行性とは呼ぶべきではな

いのか。

行為遂行性と演技性とは、一見対極にあるかに思われる。しかし、実はいかなる遂行的行為も何がしかの演技性をはらみ、いかなる演技的行為もいくばくかの遂行性を含んでいる。その意味では、遂行性と演技性とは、ある一つの行為において峻別できないものなのだ⁽²⁹⁾。

そして、デリダが示そうとしたのは、「意図」と「表現」が一致した「適切な」発言が基準・原点ではなく、「不適切な」「不純な」発言の方がむしろそのような意味をもっている、ということであった。それは、デリダが自身の造語 *différance* でもって表わそうとした事態に由来する。「差延」と一般に訳されるこの *différance* は、すでに存在する *différence* (差異) なる語とは、発音上は同じであり、書かれてはじめて区別が可能となる。これは、すでに触れた音声言語と書記言語の見かけの優劣関係の逆転が起きる一事例であるが、このような、書記言語特有の要素、エクリチュールの要素が(音声言語を含めた)あらゆる言語に伏在しており、言語が発せられるとき、この要素が必然的に自己自身との間にある種の隔たりを生み出してしまうという運動を、デリダは *différance*、「差延」と呼んだのであった⁽³⁰⁾。

どんなメッセージ、どんな遂行的発言も差延を抱えている。と言うより、遂行的なメッセージの動的構造が差延作用なのだ。つまりメッセージは、反覆可能性・引用可能性を原理的に内蔵しているがゆえに、つねに「不純」であり、「不適切」である運命にあるのだ。どんなに怒り狂った、どんなに泣き叫ぶ発言であろうと、言うならばそれは *réflexion*、反省、反覆の萌芽をはらんでいる、つまり引用されることができるのである。

とはいえ、引用や演技は原本すなわちオリジナルが存在しなければ、そもそも成り立たないのではないか。その意味で、引用はオリジナルの先行性を前提している。だがデリダが指摘したのは、そもそもオリジナルが先行しない引用というものがあるのではないか、逆に言えばオリジナルがその構造の内にすでに引用可能性をはらんでいるのではないか(引用可能性なきオリジナルなどない)ということである。そうだとすると、オリジナルと引用との明確な二項対立などなくなることになる。

次の永井均の考察は、そのことを示している。

3 「超越論的冗談可能性」

「偽装的、引用的、虚構的言語行為の二次的、『寄生的』性格は疑いえない。だが、それにもかかわらず、非偽装的、非引用的、非虚構的な、一次的言語行為の成立は、偽装可能性、引用可能性、虚構可能性によってこそ支えられている」⁽³¹⁾。

永井のこの部分の洞察は、きわめて精確にデリダの思考に沿っている。「偽装」や「虚構」にまで反覆可能性を拡大している点といえども、なんらその思考からの逸脱ではなく、「反覆」「引用」の延長線上にあると言える。

さらに続く永井の考察はたしかに鋭い牙えを見せてはいるが、ただし「意図」と「表現」の二項図式への依拠ゆえに、かすかな問題の兆しを宿している。

永井によると、まだ言語を習得していない子どもにあっては、意図と表現は別ものではない（自分の意図を表現と独立に意識することはできない）。ところが、言語を習得するとき（あるいは、習得したとたん）、子どもは意図と表現を独立に把握しうるはずである（つまり、そのような能力を有するに至る）。ただし、独立に把握しうるはずだが、あたかも独立に把握しえないかのように言語を習得する。つまり、子どもは「夢中」で痛いと言えるようにならなくてはならない。

「しかし、この『夢中』さは習得されたものであり、その習得のためには、諸々の可能性の中から一つの表現を選択している段階、つまり表現を『引用』し、結合していない二つの項が結合しているかのように『装う』段階が先行しなくてはならない（偽装や演技はこの意味で第一次的なのである）」⁽³²⁾

ここでは「意図」と「表現」という二項図式がためらいなく採用されている。さしあたり、このことに留意しておこう。

「一般的に言って、子供は『ごっこ』を通じて言語ゲーム（『意図ゲーム』も例外ではない）を身につけていく。これは訓練であって説明（による理解）ではなく、子供はいわば強引に眠り込まされ、ある特定の『夢』に『夢中』にさせられてしまうのである。これが人間の事象一般の出発点なのだが、しかしこの出発点においてすでに、誰もがその『夢』を一面では『夢のように』感じる事ができなければならないのだ。この人間的な『夢中』さの成立以後は、元来の動物的な『夢中』さもまたその水準に移行せざるをえない。泣くこともまた選択される記号表現の一種となって、『うそ泣き可能性』によって先行され、支えられ、侵食されるからである。

にもかかわらず、醒めることを禁じられた夢が存在する。私がこの学会発表の最後に『なーんちゃって』と付け加えて、すべてが冗談であったと宣言したとすれば、私は学会から《排除》されるであろう。それは『あつてはならない』ことなのである。……私の発言は意図と表現が一体化した『まじめな』ものとみなされるのである。……だがそれにもかかわらず、この『まじめな』学会発表も、その最も根底においては超越論的冗談可能性によって侵食されているように思われる。……そしてそれは、究極的には人生全体におよぶのではあるまいか」⁽³³⁾。

泣くことが、「うそ泣き可能性」によって先行され、支えられ、侵食される——構造的にはその通りであるが、ただしこれが「意図」と「表現」の二項図式の上に成り立っているとすれば、にわかにも同意することがためらわれる。なぜなら、「本当に泣く」こと（「意図」と「表現」の一致形態）と「うそ泣き」（「意図」と「表現」の乖離形態）の峻別は実はさほど明確でないからだ。経験的にもそれは多くの人にとって身に覚えのあることだろう。したがって、初めに「意図」と「表現」がある

のではなく、「表現」が「意図」をさまざまに湧出させると言う方が正確ではないのか。このことは、後であらためて論じよう。

永井の言う「超越論的冗談可能性」（この術語がすでに「冗談」のように思われてくるのが、この概念の真髄である）、すなわち「……な～んちゃって」のポイントは何か。今となつては死語ともされる「……な～んちゃって」であるが、これは俗語、通り言葉であり、これを正規の完結した形式にすることはいささか難しい。「……などといって」がその元の表現形式であろうが、それに続く省かれて見える部分には、あえて表現すればどうなるか。それを表わそうとしても、適当な言い回しが見つからない。理由はおそらく、みずからの発言について、それを引用符で囲むということが眼目だからである。引用することこそが、あるいはそれだけが、そこでは求められているのである。

同様な例として、「……とのこと」「……由」「……とか」「……というわけ」などが挙げられようが、これらは総じて引用符の役割を演じている。そしてこのことをさらに敷衍するなら、次のようにさえ言えるのではないか。すなわち、「……と思う」という表現が、すでに引用の萌芽である、と。一見、たとえば「……したい」と「……したいと思う」との間にはほとんど意味上違いはないように思われる。日常の会話では、単に表現を和らげるためののみ、「……したいです」と言わず、「……したいと思います」とよく言われる。が、引用可能性は気づかれることなくそこに忍び寄っているのだ。たとえば、「死にたい」という遂行的発言に対して、「死にたいと思う」「死にたいなどと思ってしまう」という遂行的発言を対照させてみると、後者の引用性がわずかに浮かびあがるだろう⁽³⁴⁾。そして、遂行的発言には、実は「……（しよう）と思う」がつねに付随していると言えなくもない。「君を殺す」という発言は、「君を殺そうと思う」という発言から、その遂行性においてどれほどの隔たりがあるのだろうか⁽³⁵⁾。つまり、それほどまでに、オリジナルな（引用される前の）発言と寄生的な（引用された）発言との境界は曖昧であり、不明確なのだ。これは、遂行的発言の内奥にすでに引用可能性が巣食っていることを示していないか。

「超越論的冗談可能性」とは、まさに永井一流の際立たった着眼であった。しかし、デリダとサールの間で交わされた論争についてコメントするときの永井は、俄然うすべらな考察者と化す。

オースティンを批判したデリダの『署名・出来事・コンテキスト』に対して、サールは『差異ふたたび・デリダへの反論』で批判し、すでに引用したように、デリダがある幻想、すなわち「生気づける意図が発語ないし表現の背後にあるという幻想」を抱いていると主張している。これに対するデリダのさらなる反論はこれもすでに見た通りである。そして永井によると、このデリダの反論において論評すべき内容は次の一点しかない、という。

「デリダは如上のような『生気づける意図=志向』観を前提したうえで、その不在を力説しているにすぎない。しかし、このような前提は、ウィトゲンシュタインを経由した目から見れば、素朴にすぎるといわざるをえない」⁽³⁶⁾。

「超越論的冗談可能性」について研ぎ澄まされた議論をしてきた永井には、あまりに乱暴な批評と言うしかない。というより、むしろ誤読である。デリダは「生气づける意図＝志向」観を前提してはいない。彼はその点を考慮したがゆえに、記号（表現）ではなく「マーク」を、意図（志向）に代えて「志向的効果」を、あえて用語として採用した⁽³⁷⁾。ともあれ、意図と表現という二項図式に則って考察をはじめた段階ですでに、永井がこのようにデリダを読んでしまう結果は予定されていたのかもしれない。

ウィトゲンシュタインには、たしかに主体の内面、すなわち「生气づける意図＝志向」などという発想はない。他者からは知りえない内面の感覚を言語が写し取る、という見方を再三にわたって否定する。内面の感覚というものが仮にあったとしても、それについては語りえない。言語ゲームを通して、すなわち共有されたルールをもつ言語によって表現されるしかないからである。

ところが、それだけではコミュニケーションが必然的に生み出す「差延」を説明できない。すなわち、コンテキストが醸成する問題や、コンテキストのなかでメッセージ自身が生み出す動的な隔たり・間隔化が明らかにならないのだ。

コミュニケーションにおいて、メッセージがそのつどのコンテキストのなかで、それ自身を超えて予期せぬ意味を湧出させるのは、いわば必然の過程である。ただ、すでに予告したように、なぜ、こうして生み出されたものを「メタ・メッセージ」と呼ぼうとするのか。メッセージに対してメタレベルのメッセージと規定しようとするのか。たしかに、メッセージを「超えた」という意味、メッセージにとって予測外という意味はあるが、果たしてそれについて「メタ・メッセージ」という規定をすることは妥当なのか。ここには、これまたある種の必然性があるのだろう。すなわち、それは、この差延作用によって生まれたものが、メッセージの上位にあって、メッセージを支配し、指示している何ものかだと見なしたがわるわれの性向であり、もっと言えば、われわれ自身に潜む、それこそ抜きがたい幻想であろう。それは決して論理的なものではないし、メッセージそれとの関係は言語とメタ言語のような関係ではない。それはメッセージの上位にはない。たとえば「無意識」が「意識」の上位にあるのではないように。

おそらくこれは、サルが依拠している「表現」と「意図」という構図といわば同形であろう。「表現」に対して「意図」が存在するように、メッセージに対して「メタ・メッセージ」があるかのように想定しようとするのが、この事態に対するわれわれの素朴な態度なのである。そして、サルは「まじめ」な遂行的発言の場合「表現」と「意図」は一致していると考えのだが、そうだとすれば「寄生的」な発言の場合「表現」の背後に「意図」があることになる。同様に、メッセージの背後に、すなわち上位に「メタ・メッセージ」は位置づけられるに至るのだ。

メッセージがつねにそれ自身を超えた意味を生み出すというこの動的構造こそが、メッセージが原理的な引用可能性をもつことを可能にすると言ってよい。というより、その構造もしくは運動がまさにコミュニケーションの構造なのだ。

この構造に、サールの「意図－表現」説は思い至ることはなかった。「表現」と一致しようがしまいが、「意図」と名指した瞬間に、それは何らかのシニフィエを喚起する。サールは、メッセージないし「表現」の発信源を主体の「意図」と見なす誤謬を犯したのである。そして、永井もまた同様である。たしかにそのように言いたくなるのは当然かもしれない。というのも、「意図と表現のズレ」こそがすべての問題の出発点であるように見えるからである。しかしそうではなく、コンテキストが不確定ゆえに、デリダ風に言えば「差延」の効果によって、あたかも意図と表現のあいだにズレが生まれるかのようにコミュニケーションは現出するのだ。したがって正確を期すなら、差延効果による動的な間隔化こそが問題の出発点だ、と言うべきだろう。

通常（すなわち、オースティンの言う「まじめな遂行的発言」において）、発話は「この発話は真剣であり、嘘偽りではない。字義通り、受け取ってほしい」といういわば「メタ・メッセージ」を発しながら語られていると言えるかもしれない。この場合、発話者において、（サールが言うように）意図と表現は一致しているということになるのか。

しかしすでに述べたように、あらゆる行為はつねに演技性をはらむ。このことは、遂行的発言がつねに引用可能性・偽装可能性をはらんでいることと同義である。上のような「メタ・メッセージ」が前提されていることが、すでに発話が「真剣さ」「額面通り」から逸れる可能性をもつことを意味している。

「意図」と「表現」の完璧な一致など、そこにはない。あるいはむしろ、「意図」と「表現」の二項図式そのものがそこにはないのだ。この二つの項が対峙しているように見えるのは、一種の幻想でしかない。なんらかの遂行的発言がなされるとする。その瞬間、「表現」が所与のコンテキストのなかで「差延」の運動を展開しはじめる。メッセージが同一物にとどまり続けるなどということはありえないのだ。こうして、その運動のなかで、そのつど「意図」なるものが生み出される。かくて「意図」は「差延」の産物なのである。本もの泣きがうそ泣きに、うそ泣きは本もの泣きに、つねに移行しうるのである。

4 教育的コミュニケーションにおける両義的パフォーマンス

ひとは、他人と約束を交わす。この約束とは、しかし、履行されない可能性、あるいは破られる可能性があるからこそ「約束」だと言えまいか。たとえその可能性が一種の「虚構」だとしても、である。破られる可能性が絶対に存在しないような約束は、もはや「約束」とは言えない。そのようなものは、時間経過とともに実現する単なる必然過程でしかないだろう。あたかも別様の選択肢の存在が自由意志の可能性条件であるとされるがごとく、破棄される可能性の存在が約束の可能性条件であるかのようでもある。

そして同様に、メッセージは、それがつねに（否定とは言わないまでも）引用・偽装される可能性をもつからこそ、メッセージたりえている。「成功した遂行的発言といえども、否応なく『不純』である」とは、実はそのことを指している。すなわち、メッセージはそれ自体、すでにある種の「揺

らぎ」を内蔵しているのである。

この不確定性はコミュニケーションにおける相互了解の素朴な受け取り方にも、微妙な影を落とすだろう。一般にコミュニケーションが成立しているとは、意思疎通がなされているということであり、相互の理解が一致しているということである。しかし、こう問うことも許されてよい。コミュニケーションに際して、互いが話し聞いている同一の言葉（シニフィアン）が、果たして同一の意味内容（シニフィエ）を指していると言えるのか。一方の意図（この意図とて実は不確かなもの）が、言葉を通して、他方に受容される。メッセージの送り手は受け手に了解されたと信じる。受け手は送り手の意図を了解したと信じる。しかし双方の理解が一致していることを、いったい何が保証しているのか。仮に一致しているとして、それを「一致」だと誰が言うのか（「神」以外の誰が?!）。相互理解が実は錯覚であり、「同床異夢」のヴァリエーションだった、などということもありえないことではないのだ。

あるいは、手紙やeメール、日記において、自らがものしたはずの文章が、時間を経て読み直してみると、書いた時点の意図とは著しく異なっているように思われてくる、ということはないか。実のところそのような経験は珍しいことではない。これは、固定した不動の文字表現に対して主体の意図が変化する事例の一つのように、ややもすると説明されがちである。ところが、そのことは書かれた文章にはかぎらない。「言った、言わない」というトラブルはよくあることだが、これは記録に残らない音声言語、発話ゆえのことではない。発話の場合記録に残されていればイエス・ノーのような明白な差異性については判別を下せるように見えるだろうが、実はそれも幻想である。たとえ記録に残る文章といえども、文章の意味は厳密には一義的ではありえない。記録された発言の事実確認といえども、当然ながら「純粹現前」では決してない。というのも、ここが決定的なポイントであるが、それはコンテキストの問題であり、件のコンテキストはすでに雲散霧消し、もはやどこにもないからだ。

「言えば通ずる」「話せばわかる」などと言われるが、実はそこには甚だしい思い込みが潜んでいるように思われる。ことによると、それはある種の思い上がりでさえあるのかもしれない。コミュニケーションを交わすためには、ひょっとすると想像以上の“謙虚さ”が必要なのだろう。

演劇や落語では基本的に毎回同じことが反復される。しかしその“出来栄え”はそのつど異なることは、当の演出家・俳優や落語家が語るところである。学校の授業も同様であろう。授業経験のある者にとっては周知の事実であろうが、内容的に、かつ方法的にまったく同じ授業あるいは講義をしても、同じ結果になることの方がむしろ稀である。メッセージはあらかじめ用意しておくことはできる。何を伝えるかについて、周到に準備することさえできる。しかし、そのことをもってパフォーマンス・行為遂行性は「成功」するのか。この場合「成功」とは、「意図」と「表現」の一致のことをいうのか。それとも「意図」が“その「意図」通りに”聞き手に伝わることをいうのか。あるいは「引用」されている以上、はじめから「成功」は挫折しているのか。何もかもが不確かである。「成功」の保証はもはやどこにもない。当然であろう。そのメッセージが伝達される際のコン

テキストが、まったく不明だからである。それは、未来が予測不能であることとほとんど同義である。

教育におけるコミュニケーションはどうか。一般のコミュニケーションは「まじめ」でない場合があってもよい。しかし、こと教育に関しては「まじめ」でなければならない、と考えられてはいないか？ 教育状況における発話こそは掛け値なく「真剣」なものであるべきだと考えられてはいないか？ 教育は「まじめ」でなければいけないとの信仰が、われわれを支配してはいないか？

たとえば、娯楽作品にあつては（あるいは芸術作品においても）暴力・殺人・性倒錯・不倫等々が題材として頻繁に、あるいは好んで採用されるが、教育に関わる場面においてはそれら厳に否定されるべきものであり、題材としても極力排除されねばならないものである。「教育」は「まじめ」でなければならないというわけだ。

かくして「ふまじめ」な教育者は、ほぼ例外なく批判の十字砲火に遭ってきたし、今後も遭うだろう。しかし、果たしてそれでいいのか。ひょっとして「教育」において事情は、かならずしも「意図と表現の一致」した「真剣」なものではなく、あるいはむしろそのようなものであるべきではないのではないか？

教育的パフォーマンス、すなわち教師の生徒に対する規範提示は、つねに「まじめ」でなければならないか？ そのような考え方や、「コミュニケーション能力の育成」課題を含めた教育的パフォーマンスそのものが、かの「全面的コンテキスト」、純粹完全現前の神話に冒されていると言えまいか？

教師は、生徒に対して発話をしながら、つねに発話の最後に「……な～んちゃって」と心の最奥でつぶやきうる。むろんこれは「経験的引用」ではなく、「超越論的引用可能性」としてである。そのことの自覚が、実は「教育」には必要なのではないか。

総じて教科書たるものはなぜ、あれほどおもしろくないのか。教科書に沿った授業は、どうしてこれほどまでに退屈なのか。とはいえ、だからと言って「教科書なんてどうでもいい」と教師は言うてはならない。教師には、発すべきとされたメッセージというものがあるからだ。ただし、それで終えてはならない。そのようなメッセージを発しながらも、教師はそのメッセージそのものを自己侵食し、内部剥離するさらなるメッセージをもっており、またもっている必要があるのだろう。それがいかなる形で表現されうるか定式化できない。コンテキストが不確定だからである。

あるいは、一般に道徳は「けむたく」「うざい」ものである。少なくとも、そのように受け取られることがある。なぜか。「教育、教育、教育が大事」とやたらふれ回る大人が、時として不快感を催させる。なぜか。道徳や教育がある種の「鬱陶しさ」を催させるとすれば、いったいその根元に何かがあるのか。

大胆な仮説を提示してみる。こと道徳や教育に関するかぎり、何かが語られ、何かがなされる際、有無を言わせぬ不動のメッセージは、果たして妥当なものなのか。デリダ流に言えば「差延」の運動をそこに感知しなければならないのではないか。すなわち常にある種の「引用可能性」をそこに

見ておく必要があるのではないか（教える側も、教えられる側も、である）。メッセージは、コンテキストのなかで微妙にうごめき、自己間隔化を伴い始めるのである。すなわち、メッセージは額面以上の意味をもちはじめたり、あるいは逆に額面以下に縮減する、ということが起こりうる。そして、もしかするとそれが常態なのかもしれないのである。そして、そのことを忘却するとき、道徳や教育が不快な感触をもち始める。

とはいえ、つねに「引用可能性」を見るなどと言っても、それは容易なことであるはずがない。コンテキストは無数・無限、というより同定不能・確定不能だからである。コミュニケーションは、そのようないわば五里霧中のコンテキストのなかで、手探りで紡がれてゆく。それゆえにこそ、生のコミュニケーションは生きいきとしているのだ。リアルタイムにおいて「教育する」ことの難しさとは、実はそこにこそあるのかもしれない。

註

- (1) この不確定性について一度たりとも考えたことがないような「コミュニケーション能力の育成」などという能天気な発言を聞かされるたび（もちろんその能力の「育成」は重要なことだろうが）、私は無性に苛立たしい思いに囚われる。
- (2) 拙稿「行為の両義性としてのパフォーマンス——教育的コミュニケーションへの示唆——」『九州大学大学院教育学研究紀要』第13号，2011，参照。
- (3) Jacques Derrida, *Limited Inc.*, Paris : Éditions Galilée, 1990, p.17. ジャック・デリダ『有限責任会社』高橋哲哉・増田一夫・宮崎裕助 訳，法政大学出版局，2002，9頁。訳文には適宜変更を加えている。
- (4) *Ibid.*, p.19. 同上訳書，11頁。
- (5) *Ibid.*, pp.19-20. 同上訳書，12-3頁。
- (6) *Ibid.*, p.27. 同上訳書，22頁。
- (7) *Ibid.* 同上箇所。
- (8) *Ibid.*, p.30. 同上訳書，26頁。
- (9) *Ibid.*, p.31. 同上訳書，27頁。「主観の不在」「コンテキストとの断絶」については、書記言語・エクリチュールに典型的に妥当することは説明するまでもないだろう。「間隔化 (espacement)」とは、書かれた記号をコンテキストの内的な連鎖における他の諸要素から分離し、現前する指示対象のあらゆる形態から分離する作用をいう。
- (10) *Ibid.*, p.32. 同上訳書，28頁。デリダはここで「記号 (signe)」ではなく、あえて「マーク (marque)」なる語を用いている。その理由は、本稿32頁，参照。また註(37)も参照。
- (11) *Ibid.*, p.36. 同上訳書，33頁。
- (12) Cf. J.L.Austin, *How To Do Things With Words*, Oxford New York : Oxford University Press, 1962, pp.3, 6, 14. J.L. オースティン『言語と行為』坂本百大訳，大修館書店，1978，7頁，12頁，25

頁，参照。

- (13) Ibid., p.22. 同上訳書，38頁。
- (14) Ibid. 同上箇所。
- (15) Derrida, op.cit., pp.38-9. デリダ，前掲訳書，36-7頁。
- (16) Ibid., p.42. 同上訳書，41頁。
- (17) Ibid., p.27. 同上訳書，22頁。同箇所において，反覆可能性 (itérabilité) についてのデリダ自身による以下のような説明がある。「〈再び〉を意味する iter は，サンスクリット語で〈他〉を意味する itera に由来するという。以下のすべては，反覆を他性に結びつけるこのロジックの開発として読むことができる」。
- (18) Ibid., p.44. 同上訳書，43頁。
- (19) John R. Searle, Reiterating the Differences: A Reply to Derrida, Glyph, No.1, 1977. ジョン・サール「差異ふたたび：デリダへの反論」(土屋俊訳)『現代思想』臨時増刊・総特集＝デリダ，vol.16-6，青土社，79頁。原典が入手できなかったので，訳文等は翻訳書に従う。
- (20) 同上書，80頁。サールは，寄生的言語使用は表現が使用されているのであって，引用(言及)されているのではないとする(81頁)。果たしてそうか？ 両者を明確に区別できると考える点で，サールはすでに反覆可能性を取り逃がしている。反復的使用なのか，引用なのか，いずれとも言えない未分化な地点というものが存在する。たとえば，今しがた耳にした言葉を，あらためて口にすると，引用とも使用とも言えるということがありうる。
- (21) 拙稿「行為の両義性としてのパフォーマンス——教育的コミュニケーションへの示唆——」『九州大学大学院教育学研究紀要』第13号，2011，83頁，参照。このコミュニケーションの構成図式は，池上嘉彦『記号論への招待』岩波新書，1984に従っている。
- (22) サール，前掲訳書，76頁。傍点は訳者。
- (23) Derrida, op.cit., p.127. デリダ，前掲訳書，143頁。
- (24) Ibid., p.128. 同上箇所
- (25) 拙稿「行為の両義性としてのパフォーマンス——教育的コミュニケーションへの示唆——」，参照。さらにこのことと関連する重大問題として，ベイトソンがメタ・メッセージをコンテキストと同一視している箇所があるが，ここでは触れない。
- (26) ただし，そうだとすれば矛盾が生じることを，同上拙稿では示した。
- (27) ベイトソンが挙げている例では，統合失調症の母親が子どもに対して敵意を抱いているが，自分ではそのことを認められずに，子どもの前ではむしろ子どもを愛していることを強調するような行動や発言をする。つまり「愛」のメッセージが，「敵意」のメッセージについて言及するメッセージになっているという。Cf. Gregory Bateson, Steps to an Ecology of Mind, 1972, New York: Ballantine Books, 1983, pp.212-14. G. ベイトソン(佐藤良明訳)『精神の生態学』思索社，1990，301-03頁，参照。
- (28) サール，前掲訳書，76頁。

- (29) 拙稿『『ふりをする』ことの伝授としての教育』『九州大学大学院教育学研究紀要』第11号, 2009, 参照。
- (30) 「差延」についての解説は, 拙稿「差延 (différance) の効果としての子ども・大人概念の分化」, 『九州大学大学院教育学研究紀要』第4号, 2002, 参照。
- (31) 永井均『〈魂〉に対する態度』勁草書房, 1991, 147頁。
- (32) 同上書, 147-48頁。
- (33) 同上書, 148-49頁。
- (34) 日本語の「思う」はかならずしも「思考」にかぎられない(他の言語でもそうかもしれない)。「意志」(……しようと^う思う), 「願望」(……したいと^う思う), 「感情」(嬉しく^う思う・悲しく^う思う)等, 「心的活動」を含めたあらゆる行為に付随していると言える。
- (35) オースティンに従うならば, 行為遂行的発言としての「君を殺す」は, その行為をまさに行ないつつ発せられて「適切」なものとなる。「君を殺したい」「君を殺そうと思う」なども遂行的発言と見なすなら事情は同様であろうが, 行為が実際になされるか, それとも「言葉だけで実質がないか」によって適切／不適切が分かるとされる。だが, この行為がなされるかどうかは(こんなとんでもなく由々しく, たぶん逆上さなかの状況では)当の本人にすら予測不能だろう。「君を殺したい, なんて思ってしまう」はもはや遂行的発言としては「不適切」に分類されるのだけれど, 上の例と何ほどの差異があるだろうか。そして最後に, 「君を殺す, な～んて。ハッハッハッ, 冗談, 冗談」。
- (36) 永井, 前掲書, 150頁。
- (37) Cf. Derrida, op.cit., p.128. 前掲訳書, 143頁, 参照。むろんこのように用語を置き換えたからと言って, 言語がそれ自体表現の限界をもつかぎり, 事態が“正確に”表現されるわけではないが。

本稿は, 平成23年度科学研究費補助金(基盤研究C)「教育的パフォーマンスにおける伝授の両義性に関する研究」(代表者 土戸敏彦)による研究成果の一部である。

The quotability in communication and educational performance

Toshihiko TSUCHIDO

It is due to “contexts” that any communication is ultimately ambiguous. According to J. Derrida the problems concerning “context” should be considered in relation to written language (*écriture*) rather than spoken language, for every language basically contains the elements of written language. *Écriture* presupposes “death” of the reader and can accordingly sever its connection to context i.e. “wholeness of the present”. This means that any message can be “quoted”.

According to J. L. Austin, in the performative utterances, if said by actor on the stage, in a poem, in soliloquy, language is used in ways “parasitic” upon its normal use, i.e. “unfelicitous”. That is to say, they are “quoted”. Based on this idea, J. Searle insisted that “felicitous” speech where “intention” and “expression” are in accord each other should be standard for the performatives. In opposition to it Derrida asserted that any performative is inevitably “unfelicitous” and involves “quotability”. Derrida called the frame of “intention” and “expression” itself into question.

What the “transcendental jokability” as H. Nagai calls it means is that speaker can quote his own speech. This shows that the boundary between the original (before quotation) speech and parasitic (quoted) speech is ambiguous and that any performative already involves quotability. Nagai also stands on the frame of “intention” and “expression”, but the contraposition of both is a kind of illusion. As a matter of fact “expression” produces “intention” in given contexts.

It seems to be considered generally that common communications can be admitted to be “unserious” but as to education communication must be “serious” i.e. “intention” and “expression” accord each other. Is that right? Sending messages to learners, teachers should be aware that his messages can be quoted by himself. The teachers have and should have further messages which outreach the messages they are sending.